

<p style="text-align: center;">図画工作</p> <p style="text-align: center;">1年C組</p>	<p style="text-align: center;">のびのび あ〜と</p> <p style="text-align: center;">～ ならべて つないで たのしもう ～</p>	<p style="text-align: center;">西井 恵美子</p>
---	--	---

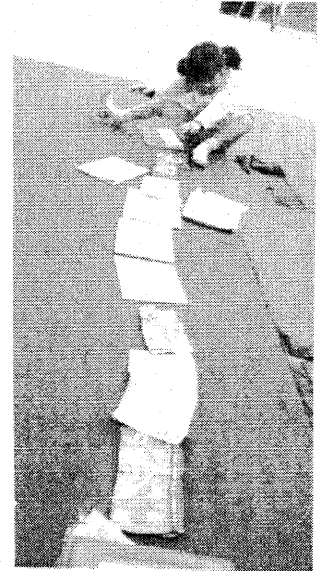
## 1. 題材について

### (1) 題材設定の理由

子どもは幼い頃から、身近にある自然物や人工のものを手にとって動かしたり、積んだり、自分なりに意味をつけたりしながら、ものとかかわりを楽しんでいる。学級の子どもたちも遊びの中で、積み木や空き箱、鉛筆などの身近な材料をならべたり、つないだり、積んだりしている姿を多く見かける。本題材は、身のまわりにある材料を活かし、「ならべる」「つなぐ」といった、造形的な行為そのものを楽しむことから始まり、ならべ・ならべかえ・ならべつづける中で、自分らしい表現や活動をひろげていくことをねらいとしたものである。そしてその中で、全身的な活動、イメージのひろがりや色や形のバランス、場所や友達とのかかわりとの関係も表れてくることを期待し設定した。

子どもたちの「ならべる」「つなぐ」造形行為には行為そのものを楽しむものもあるが、それだけでなく、同じ色のものでそろえてならべる、材料の形や色の特徴からあるものを思い浮かべてつなぐなどといった意図や思いが含まれた操作として表れることもある。これらの操作や活動は、子どもたちの日常の中で繰り返し行われていると共に、子どもたちにとって、心地よさや安心感、楽しさを引き出す行為である。また、造形的な創造活動を引き出したり、行為そのものが造形への関心や意欲につながっていきたりする。そうして生まれた造形への関心や意欲から「もっと長くつなごう」「これとあれを順番にならべていこう」などと思いついたり、次はどのようにしたいかという見通しをもつ力を働かせたりして、「すきまなくならべる」「あの場所までつながるようにならべる」というふうな方法と思いがひとつになった活動が表れてくる。そうして、自分が満足する新しい形や色をつくり出す中で表現することの心地よさを感じてほしい。

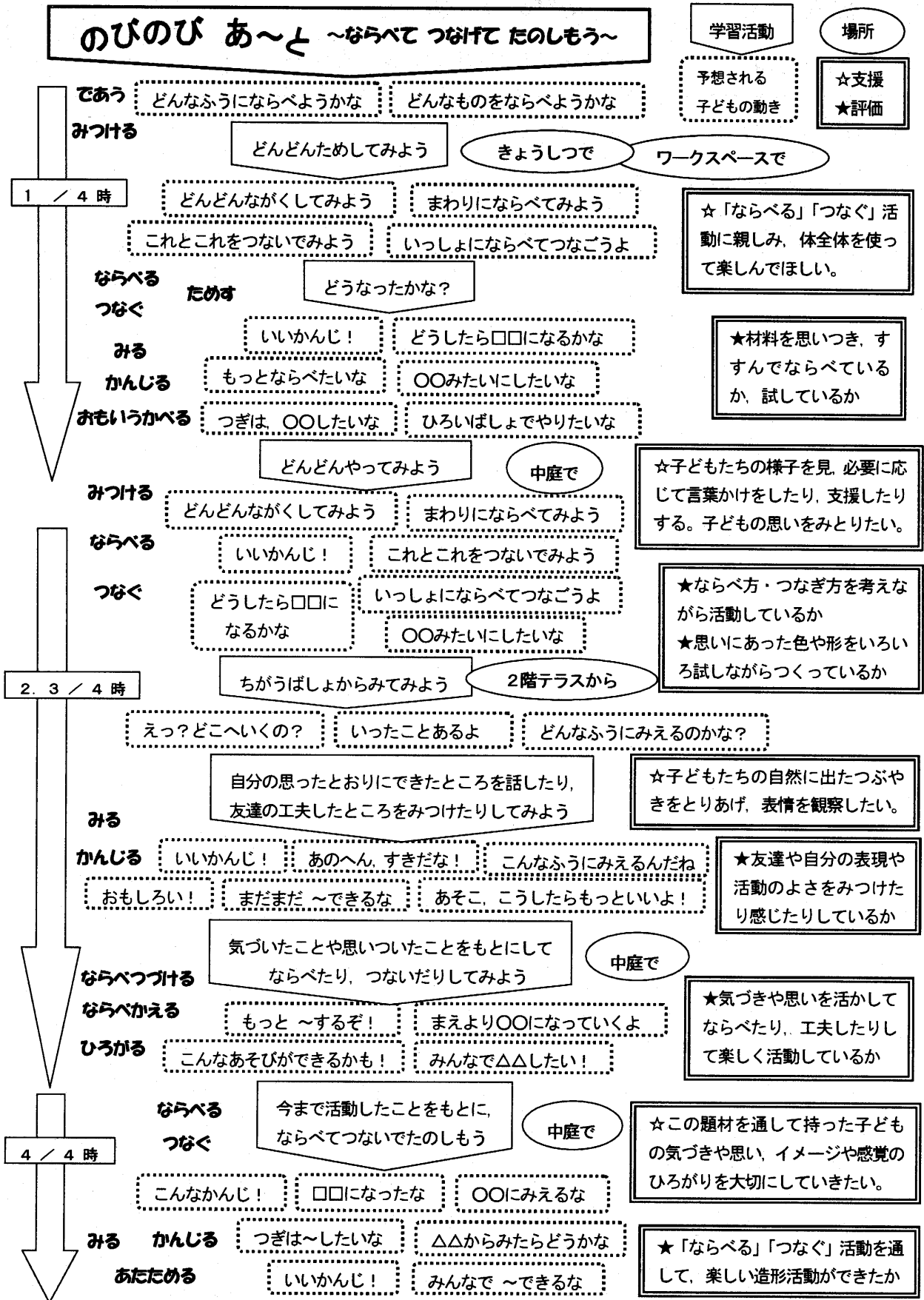
造形遊びは、一人一人の自由な行為によって展開し、造形的な資質や能力を生かし、自分の思いを形や色で表そうとすることがねらいである。机の上でもできるような小さな手先だけの活動ではなく、体全体の感覚を十分に働かせたダイナミックな活動である。そのため、十分な量の材料や広い場所が必要になる。子どもたちにとって大きな広い場所での全身的な運動は、開放感をもたらし、つくることへの意欲、関心を高める。そのため、本題材での学習の場として、中庭を使おうと考えた。学級の子どもたちにとって中庭は身近な遊び場所である。朝の登校後、休憩時間など、子どもたちは先を争って中庭にとび出していく。また学習においても、ダイナミックに動きたいときや自由にスペースを使いたいときに教室をとび出して利用することもあるので、中庭は子どもたちにとって親しみのある場所であり魅力的な場所でもある。教室よりも広く開放的なこの場は、教室から出入りがしやすく、自分の思いついたことを「あれはどうか？」「これはどうか？」とすぐに試すことができる。そして、その程よい広さは、ほかの友達の活動が視野に入る広さであり、お互いの活動のよさを知ったり交流したりしやすいという利点を持っている。したがって、友達と協力して活動することが自然に生まれ、一緒につくることの楽しさやお互いの思いを話し合いながらすすめていく楽しさなども十分味わえるだろうと考えた。



### (2) 題材目標

- 自分や友達の表現を「みる」ことを通して生まれた気づきや思いをもとに、造形活動を楽しむ。
- ・身のまわりにある材料を活かして、すすんでならべたりつないだりする。
- ・いろいろなならべ方やつなぎ方を思いついたり、工夫したりして楽しく活動する。
- ・友達や自分の表現や活動のよさをみつけたり、感じ取ったりする。

(3) 題材計画 (全4時間)



## 2. 題材の考察

### (1) 子どもが「意味と内容」をひろげた場面

本題材を通して子どもたちがひろげていく「意味と内容」を以下の二点から考察する。

#### ①「造形行為」における学び

本題材の「ならべる」「つなぐ」という造形行為を通して「意味と内容」がひろがっているといえるのは、右のような姿であると考えていた。右記のイ.に当たる子どもの姿を述べる。

S児は、はじめは数人の友達の近くで、同じように色鉛筆を

ならべてつないだりおはじきを出してならべたりしていたが、だんだんと意欲が増し、思いうかぶ全部を持ち出してきて次々にならべていった。そして、その学習後の感想にも「ならべたものはぼくのもっているほとんどです。できるだけながくつくれるようにしました。」と書いており、また、ならべている間の表情もとても満足気で、「ならべる」「つなぐ」行為を十分楽しみ、活動において心地よさを味わっていることが読みとれた。そして、次の時間ならべたいものについて「じぶんのもっているすべての(もの)やざいりょうぎんこうのものやらんどせるやすいとうをならべる。いすもつくえもならべる。」(ワークシート)と書いており、ならべたいものの数や種類が増え、イメージがひろがっていることが読みとれる。また、どんなふうにならべるかについても、具体的にならべ方を絵や言葉にしているところから、形を意識していることが伝わってくる。そして次の時間、S児はワークシートの絵のような「はなまるのかたち」をイメージしてならべていた。(写真1)

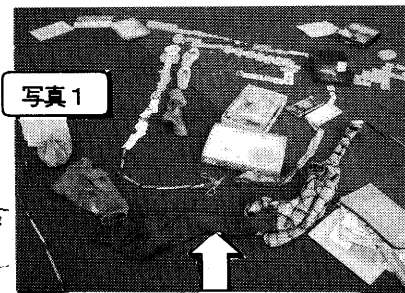
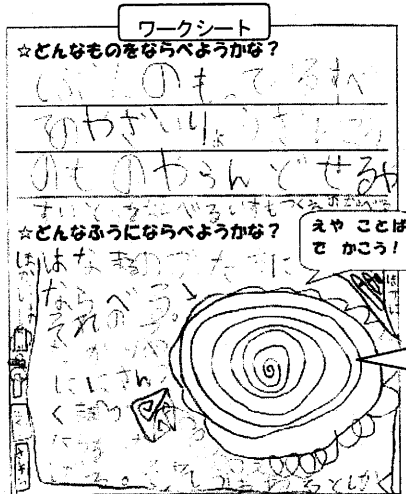


写真1  
左の絵にあるように「はなまるのかたち」を意識してならべている。

ならべるものを次々に工夫し、はいていた上靴や靴下をつなげてならべたり、着ていた服を長く伸ばしてならべたりして自分の表したいものに近づけようとするこだわりが感じられた。

このように、活動していく中で、ならべたいもの・つなげたいものの選び方、そのならべ方やつなぎ方にそれまでと違いが表れ、質的に変化した思いのもとで表現や活動をしている、S児のこだわりをもって表現や活動をしている姿は、造形行為を通して「意味と内容」をひろげている姿であるといえる。

- ア. ならべよう、つなげようとするものとかかわるうちに、そのならべ方やつなぎ方を次々に思いつき、自らすすんで表現や活動をしている姿
- イ. ならべたいもの、つなげたいものの選び方、そのならべ方やつなぎ方にそれまでと違いが表れ、質的に変化した思いのもとで表現や活動をしている姿、また、その子なりのこだわりをもって表現や活動をしている姿
- ウ. まわりとのコミュニケーションから、新しいイメージをつくりだしたり、今までもっていたイメージをつくりかえたりしながら表現や活動をしている姿

#### ②「鑑賞活動」における学び

子どもの造形活動において、表現することと鑑賞することは表裏一体で、表したりみたりしながら思いをめぐらせて活動することが常である。この表現と鑑賞の往復活動は、思いついたことをもとに表現し、新たなアイデアを

思いつき、はじめの形を変えたり別のものをつけ加えたりしてさらに新しい形をつくり出すためにも必要な活動である。本題材の鑑賞活動を通して「意味と内容」がひろがっているといえるのは、上のような子どもの姿であると考えていた。上記のA.イ.は自分自身の表現や活動を「みる」ことが主になるが、ウ.はそ

- ア. 「みる」ことによって自分の表現をたしかめ、さらに気がついたことや生まれた思いを取り入れながらすすんで次の活動をしている姿
- イ. 「みる」ことから受け取ったことを活かして、今までの表現をつくりかえたりつくりなおしたりしている姿
- ウ. 「みる」ことを通して、友達の表現や全体に目を向け、新しい活動を思いつき、すすんで取り組もうとしている姿

れに合わせ、友達や材料、空間を含めた全体を「みる」ことである。このウ.は言い換えると『まなざしの共鳴』であるともいえる。このウ.の場面については、次項で具体的に述べる。

## (2) 互いのまなざしが共鳴する実際の姿は

子どもたちの資質や能力が働き、伸びる機会のひとつとして、友達と一緒にする活動がある。子どもたちは友達の活動する様子を共感的に受け止め、そこから新しいアイデアを思いついたりし、自分の力を働かせ、伸ばし高めていく。そして材料や場所・活動を共有しながら、友達の表現から刺激を受けたり友達の表現に影響を与えたりして、お互いのよさを交流しあう姿が生まれる。これが『まなざしの共鳴』である。本題材における『まなざしの共鳴』場面について述べる。

2. 3/4時に中庭で活動していた時、数名の子どもがまわりの様子を眺めるうち「ここに人をならべたい」という表現欲求を持った。その際「そのためにどうしたいか」をたずねると、「ならべるには人数が必要」という答えが返ってきた。そのアイデアを考えた数名でならんでも“ならべている”感じがしないのだという。そこで、個々に活動の最中であるが、みんなに呼びかけてみようということになった。そしてみんなを集め「人をならべるっていうのをしたんだけど、いっしょにしてくれる？いいよっていう人だけでいいから。」と呼びかけた。(写真2)最後の「いいよっていう人だけでいいから。」という言葉には、他の友達の活動も大事にしている心が感じられる。友達が今夢中になっている活動は止めたくないが、もしよければ自分たちの表現に賛同して協力してほしいという思いが伝わってくる。その呼びかけに賛同した子どもたちは次々に中庭に寝転んで並び出した。(写真3～5) 子どもたちがそれまでにならべたりつないだりしてきた表現のそばに、人を“ならべた”様子が表現された。言い換えると、“ならんでいる人”を表現する活動を楽しんだといえる。この場面は『まなざしの共鳴』であると同時に、鑑賞活動を通して「意味と内容」をひろげている場面であるといえる。



写真2

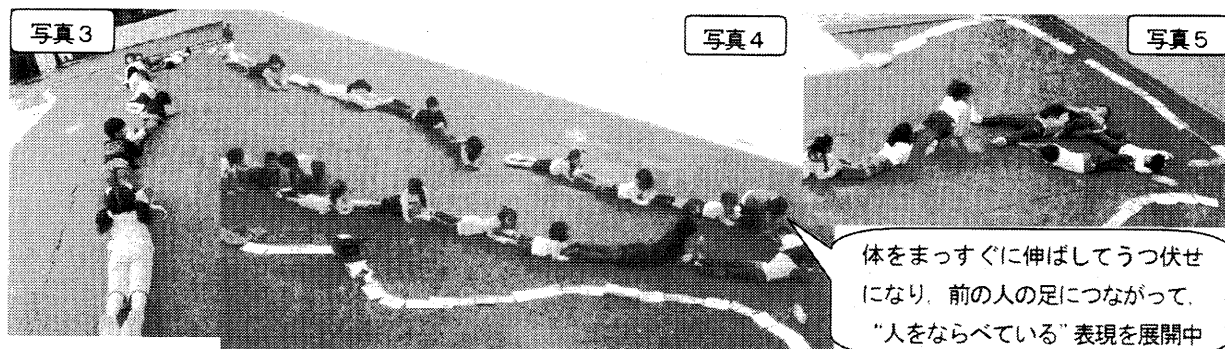


写真3

写真4

写真5

体をまっすくに伸ばしてうつ伏せになり、前の人の足につながって、“人をならべている”表現を展開中

## 5. 成果と課題

本題材において、子どもたちは一人一人が自分の表したいことやものを思いつき、イメージをふくらませながら、ならべ・ならべかえ・ならべつづける過程で、自分の表現を選んだり決めたりすることを絶えず行いながら、自分が納得できるような色や形、大きさなどにしていっていった。そこには、体全体を働かせて思いついたことをもとに想像をひろげ、材料に働きかけることを楽しむだけでなく、よさや美しさ、おもしろさなどを自分らしい感じ方や見方でとらえる鑑賞の能力を絶えず働かせている姿があった。自由で楽しい雰囲気の中で、子どもは友達のよさや表し方の面白さなどに触れ、自分の表現にも活かしていくこととなった。それは、子どもの中で表現と鑑賞とが相互に働きあっていた表れといえる。期待目標であった“自分や友達の表現を「みる」ことを通して生まれた気づきや思いをもとに造形活動を楽しむ。”は、1年生の子どもにとって高いねらいであったかもしれないが、ならべたりつないだりしたものを違った見方や視点からみることから、子どもたちは新しい見方や感じ方、新鮮な気づきを得たのではないだろうか。表現と鑑賞が相互に働き合うような学習の組み立ては、今後引き続き研究していきたい課題である。そして、子どもの発達段階を大切にしながら、子ども一人一人がもてる力を発揮し、自分が満足する新しい形や色をつくり出す中で表現することの心地よさを味わえるような題材の研究をすすめていきたいと考えている。